

いたばし

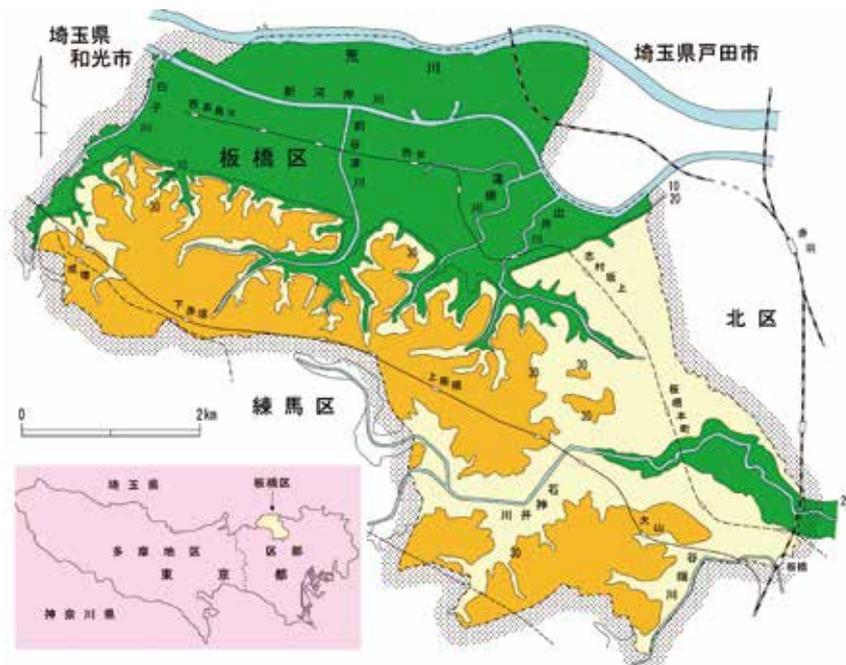
いたばしの地形と区名「板橋」の由来
-itabashi-

板橋区は東京23区の北西部に位置し、面積は32.22km²で、23区中9番目の大きさです。北西部を埼玉県、東部を北区、南部を練馬区と豊島区に囲まれています。

地形的には南側の武蔵野台地(高台)と北側の荒川低地に分けられます。その高低差は20~30mで台地と低地を結ぶ道は急な坂道です。さらに台地部分には、石神井川・白子川・前谷津川・蓮根川・出井川など多くの中小河川が台地から低地に向かって流れています。中小河川が台地を削ることで斜面が生まれ、板橋区は坂が多い地域となっています。

地名としての板橋は、鎌倉時代末期の写本「延慶本平家物語」に「武蔵国豊島ノ上滝野川ノ板橋」と書かれています。また、室町時代半ばに成立とされている「義経記」にも「いたはし」という地名があります。いずれも治承4年(1180)のことを描いた部分ですが、13~14世紀には「板橋」という地名が存在していたと考えられます。

江戸時代後期に描かれた「江戸名所図会」の「板橋の驛」には、板橋の地名について「板橋宿の中程に流れる石神井川にかけられた小橋があり、板橋の地名はこれに



由来している」ことが書かれています。

一方、『市町村名語源辞典』によると、「板(イタ)」は崖や河岸の事を指し、「橋(ハシ)」は「端(ハシ)」を指すとされています。これに従うと、板橋が武蔵野台地の端に位置する地形と合致することから、これを「板橋」の由来とみることもできます。



えどめいしよずえ いたばしぶら 江戸名所図会 板橋部分



えんぎょうほんへいものかたり 延慶本平家物語 板橋部分 【大東急記念文庫所蔵】



ぎげいき 義経記 いたはし部分

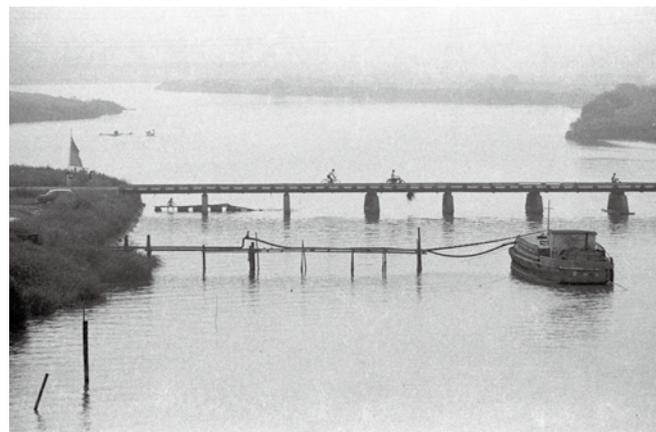
いたばしナビ -Guide for Itabashi-

「いたばしナビ」は、地図上に地形の特徴や歴史文化情報を表示することのできる検索システムです。展示している資料の位置情報を補うとともに、まち歩きや学校教育との連携をおこないます。

- 地 形 : 区内の特徴的な地形を紹介します。
- 史 跡・文化 財 : 区内の史跡文化財を紹介します。
- 歴史に残る人たち : “いたばし”にゆかりのある歴史人物を紹介します。
- 古 地 図 : 区内の絵図や古地図を紹介します。
- 地 域 写 真 : 区内を撮影した地域写真を紹介します。



たかしまどお とくまるがはら
地形：高島通り（徳丸原）



ささめばし
地域写真：笹目橋 昭和42年（1967）

いたばしの民俗 -Folklore in Itabashi-

いたばしには、無形民俗文化財となっている様々な郷土芸能を見ることができます。

いたばしを代表する民俗芸能の1つに稲作と深く結びついた行事である田遊びがあります。高島平団地の開発以前、徳丸原には赤塚田んぼや徳丸田んぼと呼ばれた広大な水田が広がっていました。水田をはじめとする五穀豊穡と子孫繁栄を祈る予祝の行事として、徳丸北野神社と赤塚諏訪神社では毎年2月11日と13日に田遊びがおこなわれています。

19世紀前半に成立した『新編武蔵風土記稿』においても“古雅ノ祭ナリ”とされていたようです。ほぼ完全な形で現在まで継承されている田遊びが少ないことから、「いたばしの田遊び」として昭和51年（1976）に国重要無形民俗文化財に指定されています。

この他にも、四ツ竹踊り、獅子舞、里神楽、餅つき、祭り囃子が区の無形民俗文化財に指定され、各地で公開・奉納されています。



とくまるきたのじんじゃたあそ
徳丸北野神社田遊び



あかつかす わじんじゃたあそ
赤塚諏訪神社田遊び

いたばしの成り立ち -Formation of Itabashi-

人が住む以前の“いたばし”は大半が海でした。このため、当時の地層から見つかる貝類の化石が当時の環境を知る手がかりとなります。いたばしが陸地化する時期にナウマンゾウの化石も見つかることから、ヒトが動物を追って日本列島へやってくる環境が整いつつありました。

●気候による川と海の変化

地球は約258万年前に始まる第四紀から約10万年ごとに氷期と間氷期を繰り返しています。気候が変わることによって北極や南極の氷や海水の増減につながり、日本列島で

は海進と海退が起こります。これまでの研究から東京都の大半が海の底となっていた頃からの気候の移り変わりが明らかとなっています。



●成増露頭

板橋区の地形は、大きく南側の武蔵野台地と北側の荒川低地に分けられます。この間には、今でも高低差20m以上の崖が続いています。

中でも武蔵野台地を代表する成増露頭は、古生物学や地質学など様々な学問分野の実習の場でした。昭和54年(1979)に成増露頭の土留め工事をおこなう時は、地質標本の製作や貝化石の採集をおこないました。



なりますどう
成増露頭 (北東より) 昭和54年 (1979)

●いたばしの化石と採集地

板橋区内の大半が海であった頃の地層である東京層からは、貝の化石が見つっています。成増露頭以外にも、都営地下鉄三田線の開通に伴う工事や石神井川の改修工事でも貝の化石が見つっています。

また、東板橋体育館や板橋法務局の近くにおいて、火山灰層の1つである下末吉ローム層からナウマンゾウの化石が見つかり、区内の動物相を明らかにする発見となりました。



いたばしの遺跡 -Excavated Sites in Itabashi-

区内には数多くの遺跡があり、約4万年前の石器から、戦中の焼夷弾まで様々なモノが地中から見つかります。文字による記録がほとんど無い旧石器時代から奈良・平安時代の生活について、遺跡から見つかったモノから読み解いてみましょう。

●いたばしの遺跡

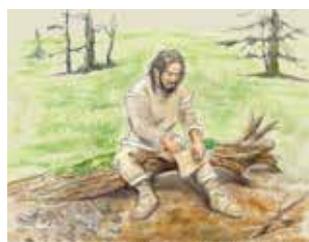
旧石器時代は、現在より寒冷的な気候でした。当時は原石を打ち割った剥片を加工して、石の道具を作ります。道具には、槍先などに使用したナイフ形石器や皮なめしに使用した搔器も見つかることから、加工した革も使用していたと考えられます。

縄文時代は、現在より温暖な気候で落葉樹なども多く生え、ドングリを採ることもできます。縄文時代から作り始めた縄文土器は、煮炊きや堅果類のアク抜きに利用することで食べることのできるものが増えました。さらに遺跡から布が見つかることから、糸をつむぎ、織物から衣類を作っていたと考えられます。

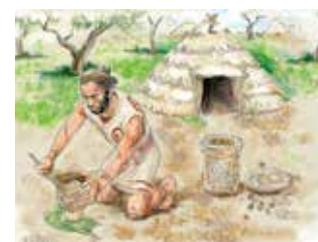
米作りが始まると、水路や水田を新たに作る必要があり、作業を指導するリーダーが必要となります。こうして社会全体が大きく変わり、弥生時代が始まりました。米は長く保存が可能であることから、ムラの中で貧富の差が生まれ、ムラ同士の富や水をめぐる争いも起こります。争いの一方でいくつかのムラがまとまる例もあり、米作りが村からクニへ変わるきっかけにもなりました。

奈良・平安時代には、近畿地方に天皇を中心とした国家が生まれます。地方には国や郡が置かれ、役人が税や戸籍を管理します。遺跡からは、文字を描いた土器やずりが見つかります。

時代	年代	代表的な遺跡
旧石器時代	約4万年前から	茂呂遺跡など
縄文時代	約1.2万年前から	稲荷台遺跡など
弥生時代	約2.4千年前から	根ノ上遺跡など
古墳時代	約1.7千年前から	前野町遺跡など
奈良・平安時代	約1.4千年前から	志村遺跡など



きょうせつき じたい
旧石器時代のようなす



じょうもん
縄文時代のようなす



やよい
弥生時代のようなす



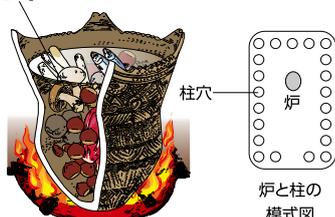
なら へいあん
奈良・平安時代のようなす

●土器とダイドコロの変化

縄文時代から作り始められた土器は、ゆでるための深鉢が作られました。縄文時代でも最初の土器は、先が尖り土の中に埋めるようにして土器を固定し、床に直接薪を置く地床炉で煮炊きをしていました。その後、土器の底は平らな底に変わっていきます。

弥生時代になると、煮炊きには甕を使います。弥生時代の後期には、甕の底に台を付けるほか、土器を薄く作るなど、効率よく熱を伝える工夫が見られます。煮炊き

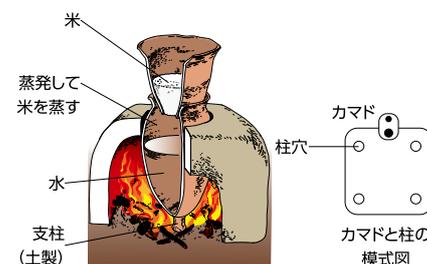
粟・肉など+水



縄文時代の炉



弥生時代の炉



こぶん
古墳時代のカマド

は地床炉でおこなわれましたが、建物の中心から片寄った位置に炉が作られました。

古墳時代の中頃には、朝鮮半島から建物内の壁に接してカマドを付けるようになります。炉からカマドへダイドコロが変わると、甕を縦長に作り、土器をさらに薄く作ります。こうして、煮炊きの時間を縮めるとともに薪の使用を抑えるなど、生活を工夫していたことが分かります。

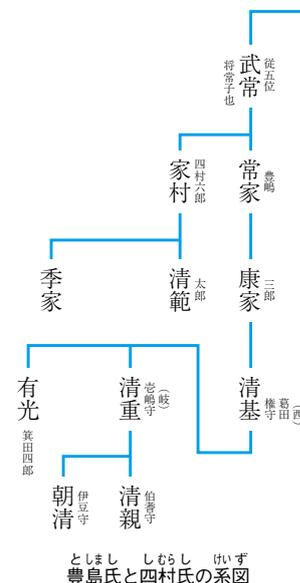
いたばしの中世 -The Middle Ages in Itabashi-

中世(11世紀末～16世紀末)は、幕府の所在地により、鎌倉時代・室町時代に分けられます。いずれも朝廷に代わって幕府(武士)が政権を担う時代です。古文書から板橋区域を支配した武士たちの姿と発掘成果から人々の暮らしを見てみましょう。

●板橋区域を開発した人々

板橋区域に位置する武蔵野邦豊島郡を開発したのは、桓武平氏秩父氏系の豊島氏です。豊島氏は11世紀後半に平恒家(豊島恒家)の名が史料に登場し、12世紀にはその孫清元が源頼朝の鎌倉幕府成立に協力し、有力な御家人(将軍の家来)となります。しかし、子孫が博奕の罪で所領(持っていた土地)を没収されるなどして、没落します。その後復活をとげた豊島氏は南北朝以後、石神井城・練馬城(練馬区)を拠点に石神井川流域を所領とし、在地領主化します。文明10年(1478)1月に太田道灌との抗争に敗れ、豊島氏宗家は滅亡します。以後、区内には支族の板橋氏と志村氏が残ります。

観応元年(1350)の志村親義着到状が『豊島・宮城文書』に属することなどから、志村氏は豊島氏庶流とされます。「六条八幡宮造管用途注文写」の武蔵国内に「志村人々」とあることから、志村氏は当区内に所在した武士と想定してよいでしょう。さらに「山門氏系図」には、11世紀後半の活動が確認される豊嶋(島)常(恒)家の弟に家村が見え、「四村六郎」と付されています。「四村」が「しむら」と読めることから、豊島氏と志村氏は同族として板橋区域を開発したと考えられます。



●豊島氏の滅亡と太田道灌

扇谷上杉氏の家宰太田道灌は文明8年(1476)におきた長尾景春の乱の鎮圧に力を注ぎ、その中で豊島氏と戦います。扇谷上杉氏は武蔵国南部の支配を川越(埼玉県川越市)・岩付(埼玉県さいたま市)・江戸(千代田区)を拠点としていたため、豊島氏の石神井城と練馬城が江戸と川越の連絡の妨げになることから、豊島氏の排除を考えます。このため、豊島氏は景春に応じたと思われます。文明9年4月13日に道灌が練馬城の豊島平右衛門尉を攻め、道灌が帰陣しようとしたところに兄の豊島勘解由左衛門尉が石神井城を出陣したので、江古田原(中野区)で撃破します。その勢いで18日に道灌は石神井城を落城させます。さらに道灌は石神井城の破却を申し入れますが、勘解由左衛門が応じませんでした。21日に道灌が外廓を攻め落とすと、勘解由左衛門は行方不明となります。

翌年1月に平塚城(北区)で再起した勘解由左衛門ですが、道灌はこれを攻め、足立まで追いかけますが勘解由左衛門は、再び行方不明となります。こうして、豊島宗家は滅亡しました。



●赤塚郷の領主変遷

中世の板橋区域には、板橋郷・赤塚郷・志村庄の3つの郷庄があります。いずれも平安時代末～仁治2年(1241)まで開発領主である豊島氏領となりました。その後、武蔵国主北条氏-足利直義-足利直義正室(本光院)-足利義詮正室(渋川幸子)-春屋妙葩(天龍寺住職)-鹿王院と領主をかえていきます。15世紀半ばには、扇谷上杉氏を頼り逃れてきた千葉(武蔵千葉)氏領となります。千葉実胤が赤塚郷に入り、自胤-守胤-治胤-憲胤と続きます。天正2年(1574)に憲胤の後継者が関宿合戦(千葉県野田市)で戦死すると、主家にあたる小田原北条氏の一門である玉縄北条氏繁の三男を養子に入れ、直胤と名乗らせます。そして、天正18年の小田原北条氏滅亡まで武蔵千葉氏領として存在します。



むさしちばし
武蔵千葉氏の系図

いたばしの近世 -Itabashi in the Early Modern Period-

中山道が整備されると板橋は大いににぎわいます。江戸の出入り口として宿場が発展し、多くの人やモノが行き交いました。鷹狩りの場・砲術訓練地・加賀藩下屋敷も置かれ、都市近郊としての役割を果たしたのです。

●中山道と板橋宿

中山道とは、徳川家康により整備された五街道の一つです。板橋宿は、江戸の日本橋を出発して中山道を進んだときに最初にあらわれる宿場でした。旅人の見送りや出迎え、参勤交代、常に用意されていた人馬のために多くの往来があり、大いににぎわいました。3軒の名主が置かれ、宿場の維持・管理のほか、大名のもてなしなどを担当しました(上宿の板橋家、中宿の飯田家、平尾宿の豊田家)。



きそかいどういたばしのえき てんぽう
木曾街道板橋之駅 天保6年(1835)

●徳丸原と高島秋帆

長崎町年寄であった高島秋帆は、高島流という砲術の流派を興しました。出島でのオランダとの関わりから、西洋の砲術を学ぶ必要性を感じたためです。天保12年(1841)、その成果を幕府の砲術稽古場であった徳丸原で公開しました。これは、幕府が軍制を西洋式に改めるきっかけになりました。昭和40年(1965)、高島秋帆の名をとって、徳丸原は高島平と名付けられました。



たかしましろうだゆうほうじゆつげいこわざけんぶんのず てんぽう
高島四郎大夫砲術稽古業見分之図(部分) 天保12年(1841)5月

●農村と大根

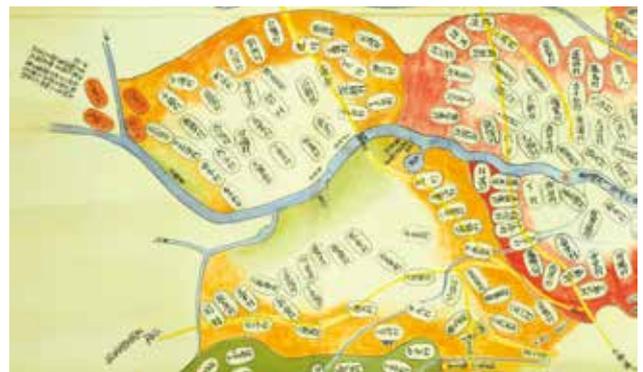
人口が集中した江戸では米以外にも大量の食糧が必要となりました。そこで、板橋をはじめとする江戸の近郊では、多くの野菜が作られました。板橋区域では大根が多く作られ、たくあん漬けなどの漬物に加工されました。「彩色大根之図」には志村沢庵大根、志村夏大根、徳丸大根などがみえます。これらの種も販売され、大坂橋本屋の広告でも紹介されました。



さいしきだいこんのず
彩色大根之図(部分)

●徳川将軍と鷹狩り

鷹狩りは飼いならした鷹を用いた狩りです。これには身分や権力を示す意味もありました。「生類憐みの令」以後禁止され、8代将軍徳川吉宗が復活させました。吉宗は鷹場の整理をおこない、板橋を戸田筋に組み込みました。志村には鷹場の管理をおこなう役人の屋敷が置かれました。獲物となる鳥が逃げないように騒音やたき火が禁止されたほか、鳥のエサであるケラなどを集めることが農民の仕事となりました。さらに、鷹狩りの際には人足としてかり出されるなど、さまざまな負担を負うことになりました。



おしろ ごりしほうたかばそうこえず
御城より五里四方鷹場惣小絵図(部分)

堀江家文書S15【首都大学東京図書館所蔵】享保10年(1725)

いたばしの近代 -Itabashi in the Modern Period-

日本は幕末から政治体制が変わる中で、西洋の知識や技術を国内の技術で補いながら取り込み、近代化を成し遂げました。いたばしでは、戦前から製作した光学兵器の製造技術をカメラに転用し、光学は区を代表する産業へと成長しています。

●加賀藩下屋敷と産業のおこり

延宝7年(1679)に板橋宿に隣接して加賀藩の下屋敷が置かれました。下屋敷は徐々に広がり、最終的には22万坪の敷地となります。屋敷内を流れる石神井川の水力を活かし、精米や穀類の製粉がおこなわれました。幕末には下屋敷内で大砲の鑄造をおこない、砲身に穴を開ける作業に水力を利用しています。このように板橋は江戸(東京)近郊で、安定した動力を得られる場所に位置していました。明治9年(1876)には、水力が動力のベルギー製の圧磨機圧輪を用いた火薬製造所ができたところから、いたばしの産業が始まります。



あつまきあつりんきねんひ
圧磨機圧輪記念碑【加賀西公園所在】

●いたばしと交通

いたばしでは、明治16年(1883)に開業した日本鉄道の品川線板橋駅が初めての鉄道路線となりました。明治末から昭和初期にかけて、区内を通る多くの鉄道計画がありましたが、そのほとんどは実現しませんでした。東京と上州(群馬)を結ぶことを目的に設立した東上鉄道は、大正3年(1914)に池袋から田面沢(埼玉県川越市)が開通し、下板橋と成増に停車場が設置されます。大正9年には東武鉄道と合併し、東武東上線が誕生しました。昭和4年(1929)には、市電(都電)が西巢鴨から下板橋まで開通し、昭和19年には志村周辺軍需工場へ従業員を輸送するため志村坂上まで延伸しました。その後、自動車の普及と交通渋滞の影響で、昭和41年に都電は廃止されました。



とうぶねりまきかいとうしきしゃしん
東武練馬駅開通式写真 昭和6年(1931)撮影

●いたばしと戦争

アメリカ軍の空襲から将来の戦力とみなされていた子供を守るため、昭和19年(1944)8月9日から19校の国民学校全てが疎開をしました。板橋区からは、群馬県沼田市を中心とする利根郡と榛名町へ向かいます。一連の疎開では、6,300人もの子どもが親元を離れ、生活を送りました。疎開先の児童は親を想って不安な日々を過ごし、空腹が続き、病死したり空襲で両親を亡くした児童もいました。

昭和20年3月までは、アメリカ軍のB29による空襲は高高度から軍需工場や軍事施設を目標に空襲がおこなわれます。3月10日の東京大空襲以後は、低高度から面的に焼夷弾等を落とす方針が変わります。根ノ上遺跡の発掘調査では、多くの焼夷弾が見つかり、平成8年(1996)の都立大山高校の建替え工事では不発弾が見つかるなど、これからも戦争に関するモノが地中から見つかるかもしれません。



いたばしだいこくみんがっこうがくどうそかいりよかんないじほぎょうふうけいしゃしん
板橋第一国民学校児童疎開旅館内授業風景写真
【板橋第一小学校提供】

いたばしのこれから -The Future of Itabashi-

高島平団地の誕生、都営三田線の開通など、いたばしは都市化の波に洗われながら、絶えずその姿を変化させ、発展しています。これまでのいたばしの歴史を振り返りながら、わたしたちのいたばしの現在と未来を考えてみましょう。

●田んぼから高島平団地へ

明治42年(1909)の町村別米収穫高によると、北豊島郡では赤塚と志村が1・2位となり、赤塚田んぼと徳丸田んぼの位置する徳丸原が米どころであったことを伺わせます。戦後は、生活廃水による水質の悪化などにより、収穫高が落ち込み、農業が衰退します。昭和36年(1961)頃に赤塚田んぼ・徳丸田んぼに住宅を建設することが計画され、国内最大級の区画整理事業が始まりました。こうして、広大な田園風景は高島平団地に姿を変え、総戸数は10,170戸、約3万人が住む街ができました。現在の団地では高齢化が進み、年齢層に応じたサービスの充実や若い世代向けのリノベーションなど、これからの見据えた取り組みがおこなわれています。



たかしまだいらだんち まど
高島平団地の間取り(2DK)
【UR都市機構所蔵】

●都営三田線

都営三田線は、都電に代わる交通機関として計画され、都営地下鉄6号線と呼ばれました。高島平団地の建設計画と同時期に設計されたため、志村駅(現在の高島平駅)を終点とします。昭和43年(1968)から営業運転が始まり、巣鴨駅から志村駅が開通しました。その後、予定されていた東上線の大和町駅(現在の和光市駅)との相互乗り入れ計画が白紙となり、高島平団地西部の交通手段が絶たれたため、東京都交通局は昭和51年(1976)に新高島平駅と西高島平駅を設置します。平成12年(2000)の東急目黒線との相互直通運転の開始などにより、都営三田線の乗客が増えたため、令和4年度(2022)には一部の編成を6両から8両とする計画があります。



たかしまだいらえき
高島平駅と高島平団地
昭和46年(1971)4月12日

●学校いまむかし

昭和29年(1954)以降の高度経済成長により、都市部の人口が急増します。区内では高島平団地の完成による子どもの急増に対し、小・中学校の建設が急ピッチで進み、昭和60年(1985)のピーク時には、小学校57校、中学校24校となりました。これ以降は児童・生徒数は減少傾向にあり、学校の統廃合が進められています。近年の学校改築では、壁で閉じられることのない多目的に利用可能なオープンスペースの設置や教科ごとの専用教室を備えた教科センター方式を採用するなど、子ども達がいきいきと学ぶことのできる環境が整えられています。



びじゅつ ぎじゅつ なかがい
美術・技術メディアスペース(中台中学校)
【板橋区教育委員会所蔵】
引用:板橋区・板橋区教育委員会監修
『板橋教育改革新しい学校はこうしてつくる』(2017)

●時をつなぐ文化財

平成29年(2017)10月13日に加賀一丁目7番と8番に残る陸軍板橋火薬製造所跡が国史跡に指定されました。ここは、明治9年(1876)に加賀藩下屋敷の跡地に設置された、日本初の官営火薬製造所の遺跡です。現在も、火薬製造の一連の工程を理解できる遺構やノーベル物理学賞受賞の湯川秀樹らの研究室となった理化学研究所が残ります。このように、明治維新から戦後まで、国を挙げておこなわれた研究施設が残されていることから国の文化財となりました。こうした時代を越えて、受け継がれてきたモノやコトが文化財として区内に残っています。これまで私たちが守ってきた文化財を学ぶことで、これから進むべき方向が見えるのではないのでしょうか。



いたばし しせきこうえん かしょう せいび
板橋区史跡公園(仮称)整備イメージ
【板橋区教育委員会所蔵】

引用:板橋区『史跡陸軍板橋火薬製造所跡保存活用計画』(2019)